

〈原 著〉

高校生における逸脱行動と共感性および暴力肯定観との関連

田中 純夫*・水野 基樹**・今野 亮***
山田 泰行***・杉浦 幸***・菊地 奈美***

The relationship of deviant behavior with sympathism and acceptance
of violence in high school students

Sumio TANAKA*, Motoki MIZUNO**, Ryo KONNO***,
Yasuyuki YAMADA***, Miyuki SUGIURA*** and Nami KIKUCHI***

Abstract

I am going to focus on the conscious dimension in high school students' deviant behavior, illegal activities and dropping out of high school.

The conscious dimension index includes cognitive sympathism (perspective taking), emotional sympathism and acceptance of violence.

1. Cognitive sympathism is a inhibiting factor to deviant behavior.
2. In emotional sympathism, empathy for familiar people enhances deviation, depending on circumstances.
3. Acceptance of violence is a factor which enhance various deviant behavior.
4. In distinguishing between doers of violence or not, man havea positive relationship with "justification" of the acceptance of violence's subscale, "empathy to things around" emotional sympathism. On the other hand, for women who conduct violence, "justification" and other experiences of the conscious dimension is an acceleration factor. "empathy to human of close" functions as an inhibiting factor.

On the whole, cognitive sympathism with the viewpoint of others functions as a factor to restrict deviant behavior. Emotional sympathism as a emotional syntony may be a negative factor to accelerate deviant behavior. All the same, the acceptance of violence can be an acceleration factor of deviant behavior.

Key word: deviant behavior, coginitive sympathism, perspective taking, emotional sympathism, acceptance of violence

1. 目 的

1.1 問題の背景と動機

犯罪や非行を，一般的な状況から逸脱した特異

* 教育心理学研究室

Seminar of Educational Psychology

** スポーツ経営組織学研究室

Seminar of Organizational Behavior

*** 体育心理学研究室

Seminar of Psychology of physical education

で劣悪な環境要因あるいは生来的に根深いパーソナリティの負因だけに原因帰属するのではなく、「ふつう」の人にも見られるような心性としての，適応面や発達面での不調や不全からも解明している。とりわけ未成年者の非行に関しては，情動障害理論をはじめとして，複数の事象や要因を時間的経過の中で，相互に関連づけて構造的に理解していく，いわゆる「力動論」の観点から多くの研

究業績が生まれており、犯罪非行原因論と犯罪非行者処遇論との間にあったギャップを埋め、両者の融合を推し進めてきた。その中でも、自他関係認知や自己意識と自己統制、対人認知と対人感情などの命題は、全体状況をどう認識しその中で自己をどのように位置づけて社会的に行動していくかという、社会価値と社会的志向性の両者との関係から個人の行動をとらえる非行研究の本質的命題として中心的な位置を占めるものとなろう。

少年非行の現象面での特徴としては、①短絡反応的あるいは衝動的な性質としての即行性②享楽性③集団性④攻撃的な性質⑤犯行の過剰性という5つの側面が、昭和35年の犯罪白書(創刊号)で指摘されていたが、それは現在もそのまま当てはまると考えられる。それに加えて現代型非行の特徴として、近年では、非行少年と一般少年とのボーダーレス化や犯行における非社会性の増大等が指摘されている。思春期の逸脱行動や非行を考える上では、この2つの視点は不可欠であると考えられる。

このような観点から、現代の高校生における逸脱行動経験を、日常の行動の延長上でとらえ、彼らの意識側面を重層的に探ることから逸脱行動の生起に関わる要因を浮き彫りにしていきたいと考えている。

1.2 目的

現代の学校現場においては、陰湿な「いじめ」の広がり、「学級崩壊」の頻発、キレる行為やイキナリ型暴力等の増加が指摘されており、これは上述した非行のボーダーレス化とも表裏一体をなしている。こうした「社会化の不全」を、自己統制などの自我の機能的側面と主体性などの自我の自立的側面の双方を考慮し、逸脱行動の生起にかかわる対人場面での認知・意識・行動の諸特徴を今回は主に質問紙調査法によって測定し、分析を試みる。尺度として取り上げた指標は、①行動面では社会規範からの逸脱行動(違法行為や無断外泊や怠学などの不良行為)②意識面では認知的・情動的共感性、また③意見レベルでの意識として暴力肯定感である。逸脱行動、特に暴力的な行動の発現において共感性は抑制要因として働くこと

が期待されるが、実際にどのような側面と関連するのかを明確にし、一方で暴力を正当化し、罪悪感を中和する方向で関与するとされる暴力肯定観は、暴力そのものや逸脱行動全般を助長する方向に影響すると考えられ、共感性との相互関係の中でどのように作用するのかを明確にしていくことを今回の目的と考えている。

2. 方法

2.1 調査対象者は、首都圏の高校生2192名(男子864名女子1328名)

学年	男子	女子
高校1年生	326	482
高校2年生	310	415
高校3年生	228	431
計	864	1328

2.2 行動経験と意識調査の調査内容

高校生に対して、過去における行動経験と意識側面について、以下に示す側面について自己申告式の質問紙調査法を用いて調査を行った。

(1) 逸脱行動経験

万引き、無免許運転などの違法行為のほか、警察による補導の対象とされる、飲酒、喫煙、無断外泊、怠学などの不良行為などを包括して、逸脱行動として取り上げた。これらは、非行あるいは非行の前駆症状的行動と位置づけることができる一方で、青少年対策本部の報告(1982)¹⁸⁾においても指摘されたように、思春期・青年期の発達のプロセスの中では一過性に発現する逸脱であるとも考えられる。特に後者の理解の仕方は、近年の犯罪心理学では重要な視点であり、思春期の自我形成プロセスにおける一里塚的な役割実験とも位置づけられるポジティブな意味合いも含まれており、一般の高校生の中にも十分に読み取れる状況であると考えて調査項目とした。

質問項目は、表1に示した内容であり、15項目から構成されており、それらの経験の有無を尋ねたうえで、過去一年間の経験回数についても回答を求めた。

(2) 認知的共感性

対象を他者の視点から見たときに、どのように見えるかが理解できるようになることをパースペクティブ・テイキング (視点取得) という。他者の認知や感情の内容を理解することも含まれている。つまり、他者への共感性の認知的側面を示す

表1 逸脱行動経験の質問項目

ア. 親のお金や持ち物をだまって持ち出して使った
イ. 親にだまって外泊した
ウ. タバコをすった
エ. 病気やケガなどの理由がないのに学校や仕事をさぼった
オ. 異性をナンパした (ナンパされた)
カ. 親にかくれて酒やビールを飲んだ
キ. 夜おそくまで街の中で遊んだ
ク. 免許がないのに、車やバイクを運転した
ケ. 公共のもの (学校・公園など) をわざとこわしたり、汚した
コ. 店の品物をだまって持ち出した
サ. 人をおどして、お金や物を取った
シ. テレクラやツーショットダイヤルに電話した
ス. 他人の自転車を盗んだり、かってに使ったりした
セ. けんかをして人をなぐったりけったりして、ケガをさせた
ソ. 友達といっしょになって、他の人をいじめたり、仲間はずれにした

概念であるといえる。

Davis (1983)⁴⁾は、共感性の質問項目を作成するにあたり、他者の視点をどれくらい共有できるか、つまり、他者の立場からものごとを考えることがどの程度できるかを測定する尺度を作成した。

本研究においても、共感性の感情的側面 (情緒的共感性) だけでなく、認知的な側面も加えることで、思春期・青年期の共感性をより包括的にとらえることが可能となると考え、丸山・清水 (1990)¹²⁾が邦訳した項目をよりわかりやすい語句に改善するなどの調整を加えて、元来の尺度の意味を損なわないように配慮して構成した (表2)。7項目からなり、認知的共感性が高くなるほど得点が高くなるように、各項目の回答が「あてはまらない」は0点、「ややあてはまらない」は1点、「どちらともいえない」は2点、「ややあてはまる」は3点、「あてはまる」は4点と得点化し、合計得点をその指標とした。項目は表2に示したとおりである。末尾にRの印を付したものは逆転項目である。

(3) 情動的共感性

Feshbach & Roe (1968)⁸⁾, Stotland (1969)²²⁾や Staub (1978)²¹⁾は、共感を「他者の感情に一致するが、必ずしも同一ではない感情の代理的経験あるいは共有」と定義し、共感における感情反応のあり方に注目している。また、澤田 (1992)¹⁶⁾も、共感を「単なる他者理解という認知的過程だけでなく、認知と感情の両方を含む過程であり、他者の感情の代理的経験あるいは共有を必ず伴うもの」と定義している。

表2 認知的共感性の質問項目

ア. 何かを決めるときには賛成の人と反対の人の意見のどちらにも注目するようにしている	
イ. 他の人から何かいやなことをされた時に、自分も同じようなことをするかもしれないと考えるのはむしろかしい R	
ウ. 何かを決めるときには、自分と違う意見も聞こうとする	
エ. 同じ状況で他の人がなぜ自分と違うことをしたのか、その理由を考えるのはむしろかしい	R
オ. 自分とは違う意見をもっている人の考えは、なかなか理解できない	R
カ. 自分が正しいと思える時には、わざわざ他人の意見を聞く必要はない	R
キ. 友人と何かをする時には、その友人の考えることを予想しながら行動している	

このように共感性には認知的成分と感情的成分が含まれると考えられるが、後者の感情的側面を一般的には情動的共感性とよんでいる。本研究では、出口・斉藤 (1990)³⁾が Mehrabian & Epstein (1972)¹³⁾の項目を改良して作成した52項目を25項目に短縮した尺度を採用した (表3)。内容は、先行研究の結果から、これらの項目は、3つの下位尺度から構成されていることが見出されている。1: 親しい人への共感 (以下「親近共感」とする),

2: その他の人への共感 (以下「一般共感」とする), 3: その他の共感 (以下「他共感」) の3側面である。回答形式は、共感性の高い方向へ「まったくちがう」から「まったくそうだ」までの5段階評定で、0点~4点と得点化した。また、番号に下線を付したものは逆転項目であり、下位分類を「親近共感: 1」, 「一般共感: 2」, 「他共感: 3」として付記した。末尾に R の印を付したものは逆転項目である。

表3 情動的共感性の質問項目

ア. 私は大勢の中で一人ぼつんといる人を見るとかわいそうになる		2
イ. 私は落ち込んでいる人を見ると自分まで落ち込んでしまう		2
ウ. 私はまわりの人たちが細かいことを気にしたりすると、自分までいらいらしてしまう		2
エ. 私はまわりに人たちの影響を受けて気分が変わりやすい		1
オ. 私は人に悪い知らせを伝えるときは、ゆううつな気持ちになる		1
カ. 私は泣いている人を見ると、気持ちが落ち着かなくて困ってしまう		2
キ. 私は友達の気分が不安定になっていても、自分まで巻き込まれてしまうことはない	R	1
ク. 私はまわりの人が悩んだり苦しんだりしていても、平静でいられる	R	1
ケ. 私は友達が悩みごとを話し出すと、話をそらしたくなる	R	1
コ. 私は人が冷たくされているのを見ると、大変腹が立つ		2
サ. 私は動物がいじめられているのを見ると、かわいそうでじっとしていられなくなる		3
シ. 私は話し合いをしているときは、相手が自分の考えをそう思っているのかまず知ろうとする		3
ス. 私はテレビなどで戦争や殺人のドラマを見てると心が乱れてしまう		3
セ. 私は親友が先生に叱られているのを見ると、頭にくる		1
ソ. 私はテレビなどで感動的なドラマを見ると、自分をすぐその主人公に置き換えてしまう		3
タ. 私はテレビなどのドラマを見て涙ぐんでいる人を見てると、おかしいと思う事がある	R	2
チ. 私は人から何か言われると簡単に決心を変えてしまいやすい		2
ツ. 私は非常に機嫌の悪そうな人を見ると、どうして不機嫌になったのだろうかと考えてみる		2
テ. 私は友達が良い仕事 (アルバイト) を見つけたときは、自分のことのように喜んでしまう		1
ト. 私は大勢の人たちが集まっているところで、まごまごして困っているのを見ると、落ち着かない気持ちになる		1
ナ. 私はまわりの方が興奮していても、巻き込まれないで平静でいられる	R	2
ニ. 私は嫌いな人がしかられているのを見ると、いい気味だと思う	R	1
ヌ. 私は他人の問題に巻き込まれないように、その人と距離を置こうとする	R	3
ネ. 人の心の中でおきていることは、他人には本当は分からない	R	3
ノ. 私は口に出して言わなくても、親友ならば何を考えているのか大体分かる		3

表4 暴力肯定観の質問項目

ア. 暴力も、相手がけがをしなければ、周りがいろいろ言う必要はない
イ. いじめられている人をかばうと、自分もやられるからしれないから、知らんぷりをするのはしかたない
ウ. 人から暴力を振るわれるのは、その人が相手を怒らせるようなことをしているからだ
エ. 友人がやられた仕返しのためなら、仲間に加わるのは当然だ
オ. 暴力がはこびるのは、大人がだらしなからだ
カ. 今の社会では、強い者が弱い者を押さえつける仕組みになっていて、どうやってもいじめはなくなるらない
キ. 表に出ない暴力は、多かれ少なかれみんな経験している
ク. 親や大人が暴力を振るうから、子どもがみんなまねをする
ケ. 世の中はどうせ変わらない
コ. まじめな人と付き合うのはごめんだ
サ. 将来のために今の楽しみをがまんするのは、ばかげている
シ. 悪い奴をやっつけるためになら、ルールを破るのも仕方がない
ス. 妥協するくらいなら、腕力でかたをつける方がすっきりする

(4) 暴力肯定観

暴力行動についての言い訳や正当化のようなかたちで積極的な価値を見いだすことを、ここでは暴力肯定観と呼ぶ。安香・藤田 (2000)¹⁷⁾の用いた14項目を、一部改良して13項目で構成した。項目は表4に示したとおりで、回答形式は、暴力肯定観が高いほうへ「まったくちがう」から「まったくそうだ」までの5段階評定で、0点～4点と得点化した。

3. 結果と考察

3.1 逸脱行動の実態

ここで取り上げた、逸脱行動は行為の性質から、「犯罪」、「不良行為」、「性逸脱」、「いじめ」の4領域に分類した。表5は、男女別に各行動の経験率を示している。

違法行為である「犯罪」の各行為においても、予想以上に経験しているものが多く、一般の高校生にあっても、いわゆる非行の一般化は進行している様子が伺える。特に、男子では財産犯である、万引きや自転車盗は3割を超えていること、さらにけんかをして殴るなどの暴力行為は4割を超えている結果となっている。非行の前駆的な行

表5 逸脱行動の経験率

	分類	男子 (%)	女子 (%)
ク. 無免許運転	犯罪	25.5	8.1
ケ. 公共物壊す	犯罪	27.2	12.5
コ. 万引き	犯罪	33.6	20.4
サ. 恐喝	犯罪	4.9	1.1
ス. 自転車盗	犯罪	32.3	13.0
セ. 暴行 (殴って怪我)	犯罪	42.2	11.9
ア. 親の金品持ち出し	不良行為	40.4	36.3
イ. 無断外泊	不良行為	19.1	12.1
ウ. 喫煙	不良行為	39.8	18.6
エ. 学校サボり	不良行為	46.7	42.1
カ. 飲酒	不良行為	48.3	41.7
キ. 深夜徘徊	不良行為	59.0	48.8
オ. ナンパ	性逸脱	11.9	44.3
シ. テレクラ・ツーショット	性逸脱	6.6	13.1
ソ. いじめ・仲間はずれ	いじめ	47.9	48.7

動と考えた不良行為、飲酒、喫煙、怠学、深夜徘徊でもおおそ約半数の高校生が経験している状況が浮き彫りになり、やはり日常生活の状況と非行との連続性を類推させられる結果である。ま

た、性逸脱については女子生徒で顕著に経験頻度が高いことも示されている。男女ともにいじめの経験率の高さも注目に値する。

3.2 意識側面の基本集計

認知的共感性は、先行研究においても1因子構造が示されており、今回のデータでも内的一貫性の指標であるクローンバックの α 係数が.610と比較的に高いので、7項目の合計得点を尺度として採用することにした。また、情動的共感性については、方法で述べたように大川ら(1997, 1998)¹⁴⁾¹⁵⁾や出口ら(2000)⁶⁾が繰り返し検証した3下位尺度を採用した。

また、逸脱行動については、安香・藤田(1998)¹⁷⁾の先行研究の結果をふまえながら、因子分析(主因解法→プロマックス回転)を行った結果は表6のとおりであり、やはり3因子構造を示したが、先行研究とは若干項目のまとまり方に違いが生じた。しかし内容の妥当性や因子の解釈可能性、内的一貫性の指標である α 係数等を勘案し、今回の結果のとおり表6に示した各因子の項目で下位尺度を構成した。

認知的共感性全体、情動共感性全体、暴力肯定

観全体とそれぞれの尺度の平均値を男女別に示したものが、表7である。

認知的共感性と情動的共感性に関しては、全ての指標において男子より女子の平均値が有意に高くなっている。暴力肯定観では、「正当化」は男子が高く、逆に「大人不信」は女子が高く、「あきらめ」には差が見られなかった。こうした結果から、今後の分析は、男女別に行うことが妥当と考えられる。

表7 意識側面の男女別平均値

	男子		女子
認知的共感性	17.0	<	18.1
全情動的共感性	53.0	<	61.1
親近共感	20.0	<	23.4
一般共感	20.0	<	23.0
他共感	13.0	<	15.0
全暴力肯定観	23.1	>	21.5
正当化	12.1	>	10.1
あきらめ	6.7		6.6
大人不信	4.3	<	4.8

<, > : p<.05

表6 暴力肯定観の因子分析の結果および信頼性係数

暴力肯定観質問項目	(信頼性係数: α)	1	2	3	共通性
ス. 腕力でかたをつける方がすっきりする	(0.625)	0.668	-0.084	0.012	0.401
エ. 仲間のためなら仕返しをする		0.575	-0.040	0.047	0.320
シ. 場合によってはルールを破っても仕方ない		0.540	-0.019	0.078	0.302
ア. 暴力も相手がケガをしなければよい		0.492	0.067	-0.083	0.266
サ. 将来よりも今が楽しければよい		0.354	0.111	0.009	0.178
ウ. 暴力をふるわれる人も悪い		0.333	0.105	-0.025	0.151
ケ. 世の中はどうせ変わらない		0.026	0.613	0.004	0.395
カ. 表に出ないだけで暴力はみんなしている	(0.564)	-0.093	0.608	0.106	0.394
イ. 自分を守る為ならいじめも仕方ない		0.093	0.360	-0.070	0.149
オ. 大人のせいでも暴力がはびこっている		0.092	-0.024	0.624	0.402
ク. 大人のまねをして暴力をふるう	(0.567)	-0.078	0.054	0.585	0.362
	因子寄与率	18.762	6.858	2.833	
	累積寄与率	18.762	25.620	28.453	

3.3 認知的共感性と情動的共感性の関係について

認知的共感性と情動的共感性の関連性を明らかにするために、認知的共感性、全情動的共感性および3つの下位尺度について、ピアソンの関率相関係数を算出した(表8)。全情動的共感性と認知的共感性との間には弱いながらも正の相関が見られた。また、情動的共感性の3つの下位尺度間では比較的の高い正相関が見られる。ここでは特に目立った男女差は見られなかった。また、情動的共感性の3つの下位尺度と認知的共感性の間には正の相関が多少垣間見ることができる。また、若干、女子の方が認知的共感性と下位尺度の「親近共感」の相関係数がやや高く、女子において相互の関連性がより強く働いている可能性が示唆された。

情動的共感性と認知的共感性との間には正の相関が見られたが、共感における認知と感情の両側面は、感情が認知に影響を与え、認知が再び感情に影響を与えるといった相補的な影響力を持っていることが考えられる。Broke (1971, 1973)¹⁾²⁾やDeutsch & Madle (1975)⁷⁾の定義では、共感とは、「他者の考え、視点、感じ方を認識、理解する能力」とされ、他者の感情を汲み取り、かつパースペクティブ・テイキングをより適切に行うために

表8 認知的共感性と情動的共感性の相関

	認知的共感性	全情動的共感性	親近共感	一般共感	他共感
認知的共感性	1	.183**	.171**	.115**	.176**
	1	.183**	.207**	.074**	.160**
全情動的共感性		1	.838**	.862**	.704**
		1	.828**	.837**	.709**
親近共感			1	.595**	.397**
			1	.555**	.376**
一般共感				1	.416**
				1	.392**
他共感					1
					1

** <.01 (上段:男子 下段:女子)

は、やはり共感における認知的側面がその役割を負うところが大きいと考えられる。

また、一方では、認知的共感性と情動的共感性は異なる役割と機能を持っている側面もある。Hoffman (1975, 1982)¹⁰⁾¹¹⁾や Staub (1978)²¹⁾らが指摘したように、共感とは、他者の感情に一致するが、必ずしも同一ではない感情の代理経験あるいは共有であるとみる。結果はこれを支持しており、共感における情動的な要素は他者の感情に焦点をあてて同一化するが、他者の視点を必ずしも伴っていない感情ということもでき、相手の視点取得である認知的共感性とはずれが生じているとも考えられる。実際には共感者がある対象を見て生起する感情と対象が実際に体験している感情との間にはギャップが存在していることが普通であろう。こうしたことが情動的共感性の下位尺度と認知的共感性との間の弱い相関となって現れているのではないだろうか。このことは、後述するそれぞれの逸脱行動との相関の違いからも類推することができると考えられる。

3.4 認知的共感性と逸脱行動との関係について

認知的共感性と逸脱行動との関連性を検討した。認知的共感性と「全逸脱行動」、および逸脱行動の4領域の「犯罪」、「不良行為」、「性逸脱」、「いじめ」の相関係数を表9に示した。

男女ともに、認知的共感性と「全逸脱行動」、逸脱行動の3領域の「犯罪」、「不良行為」、「いじめ」との間に負の相関をわずかながら垣間見ることができた。これらは、田中ら (2002)²⁰⁾の報告を支持する結果であった。認知的共感性は、「犯罪」、「不良行為」、「いじめ」といった逸脱行動の出現に対して幾分は抑制的に機能する可能性が示

表9 認知的共感性と逸脱行動の相関

	全逸脱行動	犯罪	不良行為	性逸脱	いじめ
認知的共感性	-.122**	-.115**	-.103**	-.026	-.071**
	-.128**	-.118**	-.108**	-.056	-.092**

** <.01 (上段:男子 下段:女子)

唆された。「性逸脱」では、意味ある関連性は見出せなかったが、現代の青少年を考える上で「性」に対する考え方、認識、価値観については、さらなる検討が必要である。

認知的共感性は、社会規範に反する行為である逸脱行動の良否を判断するための決定要因の1つになりうると考えられ、逸脱行動の抑制要因であると見ることができるだろう。学校の生徒指導場面でも重要視されている逸脱行動を予防するためには、他者の視点から見た時にどのように見えるかが理解できるようになるという、パースペクティブ・テイキングの視点が生徒に備わる必要があるということができよう。これは、kohlberg, L.も指摘する「役割取得能力」と密接に関連するものと考えられ、社会性の育成にはやはり重要な側面であると考えられる。

3.5 情動的共感性と逸脱行動との関係について

情動的共感性と逸脱行動との関連性を検討するため、「全情動的共感性」および下位尺度と「全逸脱行動」および下位領域との相関係数を表10に示した。

「全情動的共感性」は男子において「全逸脱行動」および「犯罪」、「不良行為」との間に正の相関がわずかながら認められたが、女子においてはほとんど関連性が認められなかった。下位尺度を見ても、男子においては、「親近共感」と「不良

行為」、「一般共感」と「いじめ」、「他共感」と「犯罪」・「不良行為」・「性逸脱」との間に弱いながらも正の相関が認められたが、女子においては有意な相関が認められなかった。

男子において「全情動的共感性」は逸脱行動4領域と正の相関が幾分認められたため、情動的共感性は逸脱行動の発現において促進的に機能する可能性もあることが示唆された。

「情動的共感性」は、相手の言動を見たうえで自己の中に引き起こされる感情であるから、相手の視点は十分に配慮されない独りよがりの未熟な感情も含まれていると考えられる。男子において「親近共感」と「犯罪」や「不良行為」との間には、弱いながらも関連性が認められる。このことは、親しい人からの影響を受けやすく感情移入しやすいという性質は、時には冷静な状況認識を欠いて、感情に流されて行動してしまう傾向を助長し、状況誘発的に「犯罪」や「不良行為」につながる可能性を示唆しているのではなからうか。「他共感」は、男子において、情動共感性の3因子の中では最も逸脱行動との関連性があり、促進的に機能する場合もあることが示唆された。これは、よく考えると興味深いことで、人や言動への共感ではなく、テレビ、動物といった、本人が一方的に感情移入できるものとなっている。したがって、「他共感」が高いことは、本人の独りよがりな思い込みや、あるいはマスメディアなどの外的な影響力によって感情を揺さぶられやすい傾向とみることでもでき、いわば非行理論で言う不安定で状況に左右されやすいドリフト状況を誘発し、「逸脱行動」の促進要因となりうる可能性を秘めていると考えられないだろうか。

しかし、「情動的共感性」については、発達段階における成熟によって質的に変化する側面をも考慮に入れる必要があり、大人びた行動を意識するような一過性の役割実験としての逸脱であったり、周囲からの影響力による踏み越えであったりと、ここで見られる逸脱行動は自立するまでの成長過程の一時的な状況とも考えられる。田中ら(2002)²⁰⁾は、非行男子群と一般男子群の「情動的共感性」と「逸脱行動」の関連を調べた結果、

表10 情動的共感性と逸脱行動の相関

	全逸脱行動	犯罪	不良行為	性逸脱	いじめ
全情動的共感性	.141** .010	.106** -.022	.144** -.020	.069* .046	.080* -.023
親近共感	.116** -.001	.097** -.031	.117** .021	.029 .013	.073* -.026
一般共感	.096** .029	.057 .007	.098** .024	.040 .041	.104** .024
他共感	.139** .009	.115** -.013	.142** .011	.118** .083**	-.004 -.065*

* <.05 ** <.01 (上段:男子 下段:女子)

「情動的共感性」と「逸脱行動」との正相関は一般男子群だけに認められたと報告している。また、一般男子群においては、「情動的共感性」が初発的な非行を促進する場合があることが見出されたが、非行が深刻化しかつ恒常的に逸脱する状況とは必ずしも関連が認められないという結果も示されている。「情動的共感性」は思春期における一時的な「逸脱行動」の促進要因であるとも考えられ、だからこそ社会化の促進が教育のテーマとなる。この未熟な感情が逸脱行動という社会的に不適切な形で表出されないように、適切な自己表現が可能な場の設定や、教育のあり方を考えていく必要があると思われる。

女子においては、「情動的共感性」は逸脱行動との明確な関連性は見出されていない。男子に比べてこうした感情が直接的に逸脱行動に結びつきにくいようである。女子の精神的な自立が早いことなどが関連しているのかどうか、今後の検討が必要である。詳細な分析に当たっては、情動的共感性の高低だけではなくその内容をもう少し細分化していく必要があると思われる。これまでの研究からも、成長過程では仲間意識が強く働き、仲間集団に所属し、群れて行動する時期が現れる。そのために、自分の親しい仲間への共感が最優先され、その他の人や、社会的なことへの共感の後回しにする私事化 (privatization) 傾向があるように思われる。また、「他共感」は、テレビなどのメディアの影響を受け、一面的に感情伝播してしまうことが、性逸脱を促進させる可能性があるのではないかと考えられる。

「情動的共感性」のバランスを考え、多面的な見方のできる、つまり、認知的な視点を伴った「情動的共感性」を育てる必要があると思われる。そのためには、感情移入できることに加えて、親しい人だけではなく他者の視点を伴ったメタ認知が育まれる必要があるのだろう。

3.6 逸脱行動と暴力肯定観の関係について

ここでは、暴力肯定観と逸脱行動との関連性を検討した。「全暴力肯定観」、および暴力肯定感の下位尺度の「正当化」、「あきらめ」、「大人不信」と「全逸脱行動」、および逸脱行動の4領域の

「犯罪」、「不良行為」、「性逸脱」、「いじめ」の相関係数を表11に示す。

男女ともに、「暴力肯定観」と「全逸脱行動」の間には比較的に高い正の相関が見られた。

「正当化」は、女子における「性逸脱」との相関は低いものの、男女ともに逸脱行動の4領域すべてにおいて正の相関を示した。特に、男女ともに、「犯罪」および「不良行為」との間では高い正の相関が見られたことが注目される。

「あきらめ」は、男女ともに「全逸脱行動」との間に弱い正の相関を示し、4領域との間では、男子では「いじめ」および「犯罪」との間に正の弱い相関が見られたが、「不良行為」及び「性逸脱」とは全く関連性が見られなかった。女子においては、「いじめ」、「不良行為」、「犯罪」の順に弱いながらも関連性を示した。「大人不信」と「全逸脱行動」との間には全く関連性がみられなかった。

こうした結果からは、暴力肯定観が高校生の逸脱行動の促進要因の1つであると考えてよさそうである。「正当化」は男子において「性逸脱」が低い以外は、逸脱行動の4領域すべてとの間に正の相関を示した。中でも男女ともに、「犯罪」の経験とは最も関連性が強いことは看過できないことである。男女ともに、暴力を正当化する傾向の強い者は、暴力を伴う逸脱行動についての抑制がはずれて行動化しやすいことは容易に予測できる

表11 暴力肯定観と逸脱行動の相関

	全逸脱 行動	犯罪	不良 行為	性逸脱	いじめ
全暴力 肯定観	.318**	.296**	.251**	.165**	.223**
	.308**	.247**	.266**	.135**	.241**
正当化	.402**	.381**	.331**	.215**	.213**
	.354**	.306**	.303**	.163**	.231**
あきらめ	.104**	.090**	.059	.037	.188**
	.166**	.118**	.144**	.058*	.189**
大人不信	.024	.020	.016	.022	.020
	.052	.021	.051	.024	.050

* <.05 ** <.01 (上段：男子 下段：女子)

ことである。また、暴力という攻撃性をストレートに表出するような逸脱行動さえも正当化しているために、盗みや不良行為等の他の逸脱行動領域においても踏み越える抵抗感が薄れてしまっているかのようである。

「あきらめ」は、男女ともに、「いじめ」との関連性がわずかに認められる。暴力にさらされることが多く集団の中で統制感をもてない人は、いじめという集団行動についても同様に諦観を抱きやすくと推察される。いじめに対して嫌悪感を持っていたとしても、それを止めさせることに効力感をもてないために、傍観者になってしまう傾向があるのではないかと推察される。いじめは唯一、非行少年よりも一般生徒に高い割合で認められた逸脱行動であるという田中ら (2002)²⁰⁾の報告を勘案すると、一般生徒の多くがいじめに対して「あきらめ」を抱いているのではないかと推察される。

「大人不信」は、男女ともに「全逸脱行動」、および逸脱行動の4領域との間に関連性は見られなかった。大人が暴力を振るうからといって、それを理由に自らも逸脱行動を行うというのではなく、高校生の中には「大人は大人、自分は自分」といった隔たりが存在しているようにも思われる。青年期が、従来は大人の権威性に挑んでは跳ね返されながら自立を図るプロセスであることを考えると、この断絶の持つ意味は深刻なのではないかと思われる。「不良行為」については、男子よりも女子のほうが周囲の影響を受けて行っていると考えられる。つまり、男子が目立ちたい、ストレス発散などの個人的な理由から不良行為に至る可能性が高いのに対し、女子は周囲の友達や恋人などの影響から仕方がないこととして不良行為に至っているケースも少なくないのではないかと推察された。

3.7 暴力行動に関連する要因の分析

今回の研究の中心のテーマは、高校生の中にある逸脱傾向の把握であり、また特にキレる現象の解明ももう1つの重要な関心事であった。ここでは、「犯罪」の中でも、暴力行動の3行為「公共物壊す」「恐喝」「暴行」のいずれかまたは複数を

経験したものと、まったく経験していないものとをグループ分けして、他の行動経験や意識側面の尺度を独立変数として判別分析(ウィルクスのラムダ統計量)を行った。男女別に分析した結果は表12のとおりである。

正準判別係数は男子では.418、女子では.391と必ずしも高くはないものの、ある程度の説明力はあると考えられる。

男子においては、暴力経験群に寄与する指標として、情動的共感性の「親近共感」、暴力肯定観の「正当化」、および他の逸脱行動すべて「不良行為」、「性逸脱」、「いじめ」があげられる。逆に暴力無経験群に寄与する指標は、情動的共感性

表12 暴力経験の有無による判別分析
標準化された正準判別関数係数 (男子)

認知的共感性	.026
親近共感	.140
一般共感	-.181
他共感	.047
正当化	.306
あきらめ	.062
大人不信	-.163
不良行為	.463
性逸脱	.378
いじめ	.396

正準相関係数 .418

グループの重心 1. 暴力なし群 -.482
2. 暴力あり群 .439

標準化された正準判別関数係数 (女子)

認知的共感性	.005
親近共感	-.106
一般共感	.084
他共感	-.095
正当化	.416
あきらめ	-.057
大人不信	-.169
不良行為	.437
性逸脱	.089
いじめ	.567

正準相関係数 .319

グループの重心 1. 暴力なし群 -.223
2. 暴力あり群 .809

「一般共感」と暴力肯定観の「あきらめ」であった。女子においては、暴力経験群に寄与する指標は、暴力肯定観の「正当化」、他の逸脱行動の「不良行為」と「いじめ」であった。暴力無経験群には、情動的共感性の「親近共感」と暴力肯定観の「あきらめ」である。男子では、「親近共感」は暴力行動の促進要因として働き、女子では抑制要因として働いているという興味深い結果となっている。また「性逸脱」は、男子では暴力行動との関係性が強く、女子では必ずしも連動性がないことが示唆された。

これまでも見てきたように、高校生の逸脱行動の発現には、男女では関連要因が微妙に異なっている。この時期における親密な仲間との関係は、男女で異なっていると考えられる。男子では、仲間のためなら時には誰かをやっつけてしまうというような感情伝播を引き起こすが、女子では共感性そのものは男子よりも高いにもかかわらず、攻撃行動には抑制的に働いている。全体状況や他者の状況への認知を伴っていることが行動の抑制に働いているのかもしれない。

男子では、暴力行動の発現と他の逸脱行動とは併存するのに対して、女子では、不良行為やいじめは暴力と明確に連動するが、「性逸脱」は比較的独立して出現することがわかる。裏返してみれば、他に問題がないけれども、性の領域では問題が生じることが女子では起こりうるということであり、この問題を説明できるファクターを模索する必要がありそうである。

4. まとめと今後の課題

4.1 総括

(1) 高校生の逸脱行動経験

高校生における逸脱行動は、違法行為も含めて予想以上の頻度で出現しており、非行の一般化は一層進んでいると見ることができよう。特に、財産犯(万引き・自転車盗)や対人攻撃行動が顕著であることが特徴といえる。また、非行の前駆的状态ともいえる不良行為では、多くの項目で半数近い学生が経験しているという結果であり、日常生活のあり方の連続線上に非行が発現し

ていることが伺われる。

(2) 認知的共感性と情動的共感性と逸脱行動との関連性

認知的共感性は、逸脱行動経験の「犯罪」「不良行為」「いじめ」との間で弱いながらも負相関を示し、抑制的に働くことが推察された。一方、情動的共感性は必ずしも非行行動の抑制要因にはならないとことが示唆され、「相手の視点に立つこと」を伴わないただ感情移入するだけの共感、時に状況に左右されて逸脱を誘発してしまうことも起こりうるようである。やはり、教育の中でパースペクティブ・テイキングを伴った共感性を育む必要性が示唆された。

(3) 暴力肯定観と逸脱行動との関連

暴力肯定観のなかでも暴力行為そのものの悪質性を否定する「正当化」は、暴力行動だけでなく、逸脱行動全般を助長する結果であったことは予想通りである。

(4) 暴力行動に関連する要因

特に、キレる暴力行動である、「恐喝」「暴行」「公共物壊す」の3種の行為を経験しているものとしていないものの2群に分類し、その差異を検討した。男子においては、他の逸脱行動経験や身近な仲間への親近共感および暴力の正当化などが、暴力行動の経験に関連していた。女子では、暴力の正当化や他の逸脱行動は暴力の発現に関与するが、男子のように親近共感に関連していない。情動的共感性そのものは女子の方が高いにもかかわらず、攻撃行動を助長する要因にはなっていない。認知的共感性も女子が有意に高いために全体状況や他者の視点を伴っているためであろうと考えられた。

4.2 今後の課題

今回は、高校生の逸脱行動に絞って分析を試みた。新たなデータとして、完全な逸脱ではなく、マナー違反のような迷惑行動やむしろ社会的に望ましい向社会的行動の経験も追加しており、他の行動の側面とも比較対照して分析を試みていく予定である。また、対象として、非行を犯して検挙・補導された少年のデータについても科学警察研究所や法務省矯正局の専門機関と協働して収集

したものもあり、比較対照して分析を試みていきたい。

引用・参考文献

- 1) Borke, H. (1971) Interpersonal perception of young children: Ego centrism or empathy? *Developmental Psychology*, 5, 263-269
- 2) Borke, H. (1973) The development of empathy in Chinese and American Children between three and six years of age: A cross-cultural study. *Developmental Psychology*, 9, 102-108.
- 3) 千葉浩彦 (1992) 日本応用心理学会第59回大会発表論文集, 14-15.
- 4) Davis, M. H. (1983) Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126
- 5) 出口保行, 斉藤耕二 (1990) 共感性の因子分析的研究, 東京学芸大学紀要, 第一部門教育科学 第41集, 183-196
- 6) 出口保行ほか (2000) 非行少年の共感性に関する研究, 犯罪心理学研究, 38(2)
- 7) Deutsch, F. & Madle, R. A.; Empathy (1975) Historic and current conceptualization, measurement, and a cognitive theoretical perspective. *Human Development*, 18, 267-287
- 8) Feshbach, N. D. & Roe, K. (1968) Empathy in six and seven years olds. *Child Development*, 39, 133-145
- 9) 藤原宗和・門下 泉・田中かおり・馬場誉史亜・安香 宏 (2002) 非行少年の自我構造に関する研究Ⅲ—i 逸脱行動の構造とその関連要因—, 犯罪心理学研究, 40, 42-43
- 10) Hoffman, M. L (1975) Developmental synthesis of affect and cognition and its implication for altruistic motivation. *Developmental Psychology*, 11, 607-622
- 11) Hoffman, M. L (1982) Developmental of Prosocial motivation: Empathy and guilt. In Eisenberg (Ed.), *The development of prosocial behavior*. New York: Academic Press. 218-231
- 12) 丸山純一・清水 裕 (1990) 愛他的行動と人格諸特性との関連について, 日本教育心理学会第32回総会発表論文集, 216
- 13) Mehrabian, A. & Epstein, N (1972) A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, 40, 525-543
- 14) 大川 力ほか (1997) 非行少年の共感性に関する研究 (その1), 矯正協会附属中央研究所紀要, 7
- 15) 大川 力ほか (1998) 非行少年の共感性に関する研究 (その2), 矯正協会附属中央研究所紀要, 8
- 16) 澤田瑞也 (1992) 共感の心理学 そのメカニズムと発達, 世界思想社
- 17) 総務庁青少年対策本部 安香宏ほか (2000) 青少年の暴力感と非行に関する研究調査
- 18) 総理府青少年対策本部 (1982) 不良行為少年の実態と対策に関する調査 (青少年問題研究調査報告書)
- 19) 鈴木 護・田中奈緒子・田中純夫・宮崎悠華・大川 力 (2001) 非行少年の自我構造に関する研究Ⅰ—社会行動特性について—, 犯罪心理学研究, 39, 2-3
- 20) 田中純夫・田中奈緒子・清水裕・田中かおり・大川 力 (2002) 非行少年の自我構造の関する研究Ⅲ—逸脱行動とその関連要因—, 犯罪心理学研究, 40, 42-43
- 21) Staub, E. (1978) Positive social behavior and morality: Vol. 1 Social and personal influences. New York: Academic Press
- 22) Stotland, E. (1969) Exploratory investigation of empathy. In L. Berkowitz (ED.), *Advances in experimental and social psychology*: New York: Academic Press

(平成16年10月8日 受付)
(平成16年11月30日 受理)